

小倉ゼミナール 2012年5月第3ゼミ報告

I 事業報告

1. 日時

2012年5月26日(土) 13:00~18:00

2. 場所

東京文京学習センター3階 第14講義室

3. 出席者

小倉行雄先生

M2 杉山、坂井(15時まで)、2人 M1 安原、1人 学部生 君塚、文、2人
合計6人

4. 時間割

13:00~14:00	ゼミオリエンテーション、今日のゼミ内容紹介	
14:00~14:20	休憩ストレッチ	
14:20~15:00	構成作業はどう行うか	小倉先生の講義
15:00~16:00	卒業研究のレジメ構成を検討する	小倉先生の指導
16:00~16:10	休憩ストレッチ	
16:10~17:30	4月以降のゼミの流れをつかむ	小倉先生の指導
17:30~18:00	今日のまとめ	

II ゼミ内容

1. ゼミオリエンテーション、今日のゼミ内容紹介

5月第3ゼミは、3つの内容からなる。第1は、5月定例ゼミの復習である。この復習は小倉先生の到着待ちのためゼミ生のみで行った。これもあり、定例ゼミにおける先生の講義で理解を要すると思うことを中心に意見交換した。そこでは、収束思考とか発散思考とは何かや、社会人の論文づくりで留意すべきことなどが話題に上がった。

第2は、文さんの卒業研究テーマに関する検討である。これが今回の本論的な内容になる。ここでは先生から構成作業をどう行うかに関して講義があった。ゼミ生が文さんのテ

テーマにコメントできる前提条件とするためである。この講義を踏まえ、文さんのレジメの修正を行った。

第3は、4月以降のゼミの流れに関する整理である。各回のゼミテーマを振り返ることで、ゼミはどのようにつながっているかみた。また、各回でテーマがどの程度達成されたかにも目配りし、学びに関してゼミ生が自分の置かれている客観的位置を把握できるようにした。

2. 構成作業はどう行うか

小倉先生の講義

5月定例ゼミについてのゼミ生による復習の後、小倉先生から構成作業はどう行うかの講義を受けた。これは、文さんのレジメの修正手直しを行う前提となるものである。およそ以下のような内容であった。

(1) テーマを分解することが構成作業の出発点

論文は、単位構成部分を次々と積み上げて全体構造をつくる。したがって、その特性には立体構造的な側面が出てくる。一方、論文や文献の構造に関係するものとしては、目次がある。目次は、論文や文献の各単位部分をあらわす見出し項目の一覧からなる。これは、階層展開が可能であって階層性を持つ。この点で、目次は論文の特性となる立体構造的性をあらわすのに適している。つまり、目次の展開次第では、論文の構造を的確にあらわすことができる。目次を展開して最小単位部分にまで行きつかせれば、対象の全体構造を階層的なかたちであらわすことができるということである。

このことを踏まえ、論文の構成はどう行ったらよいかみてみよう。そうすると、テーマに即して目次的なかたちで階層展開し、最小単位にまで行きつけば、論文の全体構造をあらわす構成表ができる。これにより、論文の構成ができる。もう少し具体的にいえば、次のとおりである。今テーマに即して、その第1段階の構成要素を出してみる。これが目次でいえば大項目になる。テーマの大項目への展開だけでは、内容的な最小単位に行きつかないのが通例であろう。そこで大項目がどのような構成要素からなるか考え、次の段階に分解する。これが中項目になる。これでもまだ最小単位となる一まとまりに行きつかないかもしれない。それなら、これの構成要素を考え、次の段階にまで分解する。こうして、中項目は小項目に分解される。小項目でもまだ内容的な最小単位に行きつかなければ、もう一段階分解してみる。こうして、小項目は細項目に分解される。ここで大項目から数えると、4段階目の分解になる。通常は、テーマを分解して4段階くらいまでの構成要素に降ろすと、内容的にみて最小単位の項目に行きつく。

つまり、テーマを次々とその構成要素に分解し、4段階くらいまで降ろしていけば、論文の骨格をつくる構成作業はできてくる。なお、ここでの注意事項もいっておけば、テーマを下位項目に分解するとき、途中で欠落する展開部分が出ないようにする。あるいは、展開項目に論理的な洩れがないように注意することとでもいい。

(2) テーマの階層展開は筋道を明確にする

論文で大事なことは、言いたいこと、論証したことがどれだけ伝えられるかである。では、このこととテーマの階層展開はどのように関係するであろうか。結論的にいえば、テ

一マを階層展開することで、議論の筋道が明確になる。これにより、言いたいことを的確に伝えることができるようになる。これはもう少し詳しくいえば、次のとおりである。

論文で言いたいこと、論証したことを伝えるには、何から始まるであろうか。これは伝えたい内容を外部に理解できるかたちであらわすことである。思考作用の結果として出てくる言いたいことを音声や文字のかたちにして、外部へ伝える。内面の思考作用を表出化ないし言語化するということである。しかし、思考作用は十分に整理された内容でなければ、外部にわかりやすく伝えられない。つまり、内面の思考作用を外部にわかりやすく伝えるには、単なる表出化、言語化だけでは十分でない。整理されていて、他者に伝わる内容の表出化、言語化でないといけない。こうして、論文で言いたいこと、論証したことを伝えるには、その内容について整理し、外形的にも筋道を辿れるかたちにする必要が出てくる。より具体的には、テーマに関して階層的なかたちで整序することで、論旨の流れの筋道を明らかにし、全体と部分の関係も明確にすることである。これは端的に言えば、テーマの階層展開が筋道を明確にするといつてよい。

(3) 論文の文章を書くとはどういうことか

論文づくりにおける構成作業をテーマ展開との関連でみてきた。ここからさらに論文において文章を書くとはどういうことかみていこう。

論文づくりのために物事に関していろいろ調べていくと、それによりわかったこと、明らかになったことが出てくる。そこで、これらが読み手に対して的確に伝わるように構成する。論文の文章は、これに基づいて書くものである。言い換えれば、論文において文章を書くとは、作文やエッセイのように、頭に浮かぶアイデアを思いのまま文字にして紙面を埋める作業ではない。そうではなく、論文づくりの作業ステップを踏み、そこで行わねばならない課業をこなす。これにより、書くための素材や材料が得られたら、整理し構成をする。その上で、最小の意味的まとまりの内容や情報を文章に変換し、構成に則って積み上げる。したがって、論文において文章を書くとは、論文づくりのプロセスで要求される作業を的確に行い、そこから得られるわかったこと、明らかになったことを文字に置き換える作業である。この意味では、伝えたい内容や情報の変換的な作業工程を指すといつてもよい。またそれは、調べて得た内容や知見を文章のかたちに変換したものといつてもよい。

なお、こうした意味での文章を書くことは、変換的な作業工程を行う上で必要な訓練や体得を要求する。あるいは、調べたことの構造化やそれを知見のかたちに整理する作業の経験も必要になる。こうしたものは、作業的なものであるだけに単なる頭脳活動だけではできない。同様に、文章力や文章技術だけででき上がるものでもない。論文の文章は、全人的活動としての変換的な作業工程を経験して初めて書けるものである。

3. 文さんの卒業研究の構成を検討する

小倉先生の指導

小倉先生の講義を受けて、文さんの卒業研究の検討に入った。この検討は、実は今回が初めてではない。すでに4月29日(日)の4月第3ゼミで行っている。ただし、このときは大項目の目次づくりの作業でとどまっていた。そこで、今回はこれをもう少し推し

進めたいということであった。

(1) タイトルの見直しから中身の概要をつかむ

文さんのレジメ検討は、タイトルの見直しから始まった。文さんが自分で立てたテーマは、「人材育成をねらった乳腺外来での看護相談の実践」であった。しかし、このタイトルでは、字数が多いし長すぎる。キーワードも複数入っている。これでは何を言いたいかわからず、伝わりにくい。

このため、小倉先生と文さんの間で質疑応答が行われた。この中で、文さんが何を主題としたいかも次第に明確になってきた。以下は、そうした問いと答えの紹介である。

まず、看護とは何かである。それはわかりやすくいうと、どのようなものであるか。看護は、疾患を抱える人々に対する治療的および生活的なケアといえる。

では、外来で看護相談がもとめられる背景は何か。医療制度改革により、入院日数が短くなっている。乳がん患者でいうと、平均在院日数は約1週間である。そこで、病院内の医師の治療を主とした対応だけでは、患者側にとって抜け落ちる問題が多く出てくる。たとえば、退院しても社会生活への復帰に十分な状態でない。患者は、病態への手術的対応から平常生活に戻る過渡的状态にある。そこで、日常生活においても慎重な術後対応がもとめられる。ここから疾患の治療的・生活的ケアを任務とする看護相談の必要性が出てくる。

また、医師の外来診療より、看護外来に価値があるとする理由は何か。それは、がんのような病にかかると、患者や家族にとっていろいろ不安や心配事が生ずる。なかでも、病を抱えながら日常生活をどう過ごすかが大きな問題になる。こうした問題は、医療と生活の両方に絡む。それだけに医師による外来診療に加え、看護外来で生活面のケアを視野に入れた相談に応ずることの意味が大きくなる。

(2) 当該組織の現状をとらえる

こうした前段的検討を踏まえ、文さんの卒業研究における大項目を具体化する作業に入った。大項目を第2段階に降ろす作業である。ただし、今回の5月第3ゼミでは、時間的な制約のため、第2段階に降ろせたのは大項目のうち第1番目だけであった。具体的には、埼玉社会保険病院の組織の現況に関する項目である。

また、この分解作業も文章化まで視野に入れるには、以下のような問いに的確に答えられるよう内容を具体化する必要がある。すなわち、病院の規模はどのくらいか。立地している場所はどのような環境状況か。どのようなことが立地特性としてあげられるか。医療圏はどのような範囲になるか。さいたま市の周辺か？診療科目の数はどのくらいか。病院のスタッフは、どの程度の数であり、どのような構成か。患者の数（入院患者数、外来患者数、手術件数等）はどうか。どういう医療分野が得意か。特化した分野はあるか。がんの拠点病院としての指定を受けているか。病院の設置主体はどこか。地域の医療情勢を踏まえた病院の位置づけは、どのようなものか。これはレジメの大項目でいうと、2番目の「病院が抱える問題」と関連してくる。これは病院トップが地域の医療情勢をどう受けとめ、先行きに関しどのような方向性を出すかにかかわる問題となる。なお、埼玉社会保険病院は公的病院であるが、独立行政法人化を控えていて制度改革の真っ只中にある。つまり、制度改革の揺らぎの渦中にある。そうすると、病院のマネジメント層の現状は、先行

きの方向性を示すという点で必ずしも十分でない。組織的に混迷状態にあるといったほうがよいかもかもしれない。

(3) 自分で構成をつくる場合のやり方

文さんの卒業研究の目次を分解して、レジメを具体化する作業を行った。ここから、次のようなことがわかる。すなわち、論文をつくるには、問答を繰り返し、応答を練り上げていく必要がある。そうしないと、先に進まない。ただし、これはゼミの中で先生に指導されながら行う場合なら問題はない。しかし、ゼミの場でこのすべてを行うわけにいかない。現実には、自分ひとりで構成作業を行なう場合の方が多い。こうしたときは、どうすればよいのだろうか。

これには、自分一人でもテーマをいろいろな立場や視点から考えられるようにすることが出発点になる。とはいえ、テーマに関して多面的な立場や視点で考えられるようになるには、そのことに関してすでにいろいろ調べていないとむずかしい。これは、再び初めの状態に戻り、どうしたらいいかわからないようになりかねない。このような堂々巡りの状態にならないようにするには、テーマについて基本要素となるものが何かをよく考えてみるのがよい。また、この場合に基本要素は階層分解するプロセスでどの次元になるかをよく意識する必要がある。これは、基本要素の次元を揃えるためである。その上で、基本要素の目次の分解を最小単位にまで行きつかせる。最小単位要素にまで行きついたかどうかは、これ以上分解できるかどうかにより点検し、判断する。

こうした作業をすませたら、議論を進める上で必須でない判断する素材や材料については、文章化の対象から外していく。自分で集めた素材や材料でも不要と判断するものは外し、最後に残ったものだけを文章化に向けた変換の対象にする。こうすれば、論文の一部となるブロック（1つの意味内容を持った単位的なかたまり）が容易に出来上がる。

4. 4月定例ゼミ以降におけるゼミの流れをつかむ

次に、4月以降のゼミの流れについて整理した。この作業は、ゼミ生に自分が置かれた客観的な位置を少しでも理解してもらうためである。

(1) 4月14日（土）4月定例ゼミ

4月14日（土）の4月定例ゼミは、2012年度の第1回ゼミである。これは翌日の大学本部主催のオリエンテーションと連動させるためである。そこで、会場は放送大学の幕張本部にし、合宿形式により行なった。このゼミには、総計で26人の参加者があった。この回の特徴としては、以下の4点があげられる。

- ①新入院生の全員参加に力点を置いた
- ②公開授業のかたちをとったため、ゼミ外部のゲスト参加者だけでも7~8人あった
- ③中沢孝夫先生による公開講演会を兼ねた
- ④当日のゼミテーマは、「ゼミの実体をつくる」に置いた

4月14日（土）のテーマは、「ゼミの実体をつくる」であった。通信教育のゼミの場合、遠方から来る学生も多い。このため、月1回のゼミでもまず出席者を揃えるだけで大変になる。また、ゼミを開く前の入口レベルのところでの調整や準備が大事になる。これをお

ろそかにすると、ゼミの中身に入れない。では、4月定例ゼミにおいて、多少でもゼミの中身に入って実体をつくるに至ったか。こういえば、それはほとんどできなかった。

ここには、同ゼミが公開授業、公開講演会のかたちをとり、盛り沢山の内容になったことも影響している。しかし事はそれだけでなく、ゼミ生の意識レベルの問題もある。小倉ゼミの現状でいえば、新入院生の場合、とくに顕著であるが、自分が置かれた客観的な状況と自分の実力をつかむことがむずかしいからだ。

では、ゼミ生に自分の置かれた位置をわからせるにはどうしたらよいか。これには、比較標準を与え、学びの上でのよきモデルを示すことが基本になる。これを行っているのが毎月の宿題であり、ゼミ報告の作成、ゼミ報告をつくるための素材提供メモの作成である。さらに、これらはゼミメーリングリストで共有情報化する。その上で、ゼミにおいて優良回答の検討や、グループ討議による理解の深化など、さまざまな方法を駆使して、ゼミ生個々に浸透させ、その気づきを支援しようとする。これらのことである。

(2) 4月15日(土) 4月第2ゼミ

4月15日の4月第2ゼミは、合宿ゼミの2日目である。これは前日の第1ゼミの延長のゼミである。同日の午後から、同じ放送大学本部にて行なった。参加者は15人だった。この回の主要内容は、以下の3点である。

- ①布川レジメの検討(主として外形、表記、書式の点を検討した)
- ②知的プロフェッショナルであるには、何が必要となるか
- ③読み合わせという学びの方法の開発と実践

4月第2ゼミは、前日の定例ゼミの内容を引き継ぎ、「ゼミの実体をつくる」をテーマとした。より具体的には、小倉先生の指導の下で、実習形式の読み合わせを行った。これは、出席ゼミ生の総員を巻き込むかたちのものである。読み合わせの素材は、M1布川さんの研究計画書的なレジメである。読み合わせの検討作業には、多くの時間を割いた。先生が当初に提示したゼミスケジュールは、全面的な変更をみるほどだった。ここには、論文を書くにはM1生に自分たちが置かれた客観的状況をつかんでほしいという先生の判断が働いたからである。実際、読み合わせ方式で検討すると、布川レジメには初歩的なレベルで多くの問題があることが明らかになった。

一方、読みあわせのやり方についても、先生から時間をかけた説明が行われた。これにより、ゼミ生は、多少なりと読み合わせという方法を知る機会になった。この点でいえば、少しは「ゼミの実体をつくる」というテーマに近づいたといえるかもしれない。

(3) 4月29日(日) 4月第3ゼミ

4月29日(日)の4月第3ゼミは、文京学習センターにおいて13時から17時30分の時間帯で行なった。参加者は8人だった。この回の主要内容と特徴は、以下の3点である。

- ①読み合わせの実施
- ②文さんのレポートの検討
- ③文さんのレジメにおいて欠落する大項目の柱出し作業を行った

ゼミの参加者は、修了生も含めて8人であった。このゼミでは、主として文さんの卒業研究レジメの検討をおこなった。初めは、ゼミ生のみで文さんのレジメの読みあわせを実

施した。読み合わせの方法は、前回の4月第2ゼミで教わっていたので、これの実習と軽く受けとめていた。しかし、実際は、この読み合わせをうまくこなすことができなかつた。頭では、読み合わせの方法について理解したつもりであった、けれども、表記書式など外形的にとらえられる簡単な問題にも目は向かわなかつた。このように、頭で理解することとできることの間には大きな落差がある。これを埋めるにはどうすればよいか。意識的な訓練と絶えざる実行が欠かせない。

この後、小倉先生の指導の下、あらためて文さんのレジメの読み合わせ作業を実施した。具体的には、文さんのレジメで欠落する大項目の柱出し作業を行った。

(4) 5月12日(土) 5月定例ゼミ

5月12日(土)の5月定例ゼミは、文京学習センターで開催した。開催時間は10時から18時である。参加者はゲスト参加を含め、11人だった。この回の主要内容は、以下の3点である。

- ①物事の調べ方をテーマとする5月宿題と関連の講義
- ②先行研究の調査収集はどう行うかに関する講義
- ③日本高純度化学の経営的方向性に関する提案

5月定例ゼミのテーマは、「物事の調べ方」であった。ここでは、「物事の調べ方」の講義にあわせ、先行研究の調査収集をどう行うかについて講義を受けた。

宿題に関しては、前年と比べると宿題の出し方の点で改革が行われている。たとえば、5月ゼミの宿題提示時には、小倉先生から宿題テーマの「物事の調べ方」に関する資料だけでなく、「宿題回答の手引き」も合わせて送付された。これは、ゼミ生が宿題に取り組みやすくするためである。また、これはゼミ報告づくりのための素材提供メモを作成する場合も同様である。このように、ゼミ生からみてゼミ課題やゼミ活動に取り組みやすくなるような改革がいろいろ行われている。

次の「日本高純度化学の経営的方向性の提案」は、初めはゼミ生による説明のかたちで行っていた。しかし、時間が押していた関係もあり、途中から小倉先生による講義に変わった。この講義の目的は、知的プロフェッショナルにふさわしいアウトプットを出すにはどうしたらいいかゼミ生に教えることにあった。そこで、講義は、同社の経営的方向性への提案がどのような検討プロセスから出てくるかに重点を置いて行われた。しかし、講義は、時間的制約もあってかなり端折ったものに終わった。

なお、同社は、ゼミにおける3月のフィールドワーク先である。そこで、小倉ゼミでは、なぜフィールドワークを行うかについてもついでながらふれておこう。これは一言でいえば、ゼミの活動水準を引き上げ、ゼミの質を向上させるためである。また、それは単に現場に赴いて調査をするだけでなく、事後にフィールドワークの報告書を作成することも視野に入れている。なぜなら、フィールドワークの報告書を作成することにより、ゼミ活動が見えるかたちになり、積み上げ効果を期待できるようになる。あるいは、フィールドワーク報告書というまとまった成果物は外部に向けた情報発信の手段になるからである。

(5) 5月13日(日) 5月第2ゼミ

5月13日(日)の5月第2ゼミは、文京学習センターで13時から17時30分の時間帯

により行なわれた。参加者は5人だった。この回の主要内容は、以下の3点である。

- ①牛山さんの論文テーマを深化させる
- ②このため、先生が具体的な構成レジメを提示
- ③先生の提示による構成レジメ資料の読みあわせと構成のやり方に関する講義

5月第2ゼミは、「論文の構成をどう行うか」についての実習的な内容であった。より具体的には、小倉先生が牛山さんのテーマタイトルに基づき、詳細な構成レジメを作成され

た。この資料の読みとり実習を出席ゼミ生との間で行った。なお、これは6月ゼミのテーマを先どりした学びになる。

5. 全体のまとめ

本日(5月26日、5月第3ゼミ)のゼミのまとめとして、筆者の視点から得た教訓をあげておく。

(1) メモがとれることの意味

小倉ゼミの内容は、2012年度に入ってレベルが上がってきた。しかし、ゼミの内容と比較して、参加者は少ない。これもあってか、毎回のゼミでやっていることとゼミ生個々のレベルアップは、うまくつながってこない。各回ゼミの後に出しているゼミ報告の反応もほとんどない状態である。では、こうした状況はどうしたら突破できるか。

ゼミにおける身近な活動に即していうと、ゼミ報告づくりのための素材提供メモを活用するのがよいと考える。これは書くためのいい機会であり、何より書く練習の条件が備わっている。たとえば、素材提供メモというおとり、メモレベルの文章でよい。ただ、これをゼミ報告用の素材として実際に使ってもらうには、メモの内容が他者にとって容易に読みとれるものでなくてはならない。読めるメモ、伝える内容のメモが書けないといけない。読めるメモ、伝える内容をもったメモが書けるようになるには、「みる」力や「きく」力が問われてくる。つまり、ゼミ生はこうした基礎力をまず身につける必要があるということだ。

(2) 知的プロフェッショナルを目指すこととゼミ報告づくりの関係

ゼミ報告の作成について、もう少し大きな視点から振り返ってみよう。小倉ゼミで目指すのは、かたちだけの論文を書くことではない。ゼミ生1人1人にプロフェッショナルにふさわしい力をつける。これにより、外部と勝負できるアウトプットを生み出すことにある。なお、こうした意味でいうと、ゼミの狙いは、ゼミ生個々の仕事力を高めることにあるといってもよいだろう。

そうすると、ゼミ報告の作成は、ゼミにとって死活問題ともいえるほど大事になる。なぜなら、ゼミ報告を書くことは、一方でゼミにおいて学んだことを定着させる機会になる。また、もう一方では生きた情報を分かち合うことにより、ゼミに参加したゼミ生と参加していないゼミ生を互いに結びつける役割をする。そこで、ゼミ生の協働の力により、こう

したことができるなら、ゼミ報告づくりというささやかな手段は、ゼミ生個々の仕事力を引き上げる活動に転化していく可能性がある。つまり、小倉ゼミにおけるゼミ報告は、それをつくることを積み上げていけば、ゼミの狙いを一つずつかたちにすることになる。

(3) 見通しと構想をもってゼミに参加する

小倉ゼミに出席すると、個人レベルでは必ず成果を得ることができる。ただ、これがゼミ全体としていえるかという点、たしかに留保がつく。それでも、個人レベルであれ、こうした成果を積み上げていけば、やがてはゼミとしての成果の獲得や前進につながってゆこう。

小倉先生は、見通しと構想を持つことの大事さを強調される。今回の5月第3ゼミでは、文さんのレジメの修正を素材にし、構成の問題について検討した。この経験からいえば、物事の構成を考えることは、見通しと構想を実践することに他ならないと痛感した。もっといえ、見通しと構想が十分であれば、論文は書けるといっていいかもしれない。また、見通しと構想を持つことは、物事を俯瞰する軸を持つことになる。したがって、他者のレジメを読み、評価するときには大いに役立つ。さらには、ゼミの長期的な発展に向けて自分の意見を持つことでも役立つであろう。このように、見通しと構想を持つことがゼミの発展に役立つことは間違いない。そこで、ゼミ生は、毎回のゼミには自分なりの見通しと構想をもって参加するようにしてほしい。こうした自分なりの見通しと構想は、どんな小さなことでもよい。